

## No.82 河口 龍夫

「関係—未来・2132年、関係—未来・2155年、関係—未来・2157年」

Tatsuo Kawaguchi

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8)年3月15日付 立川市市報記事より

3月は年度の終わりの月。進級、進学、卒業、転勤、就職等、人生模様の変化に目を奪われがちだが、時だけはだれに対しても等しく流れている。時間の流れにだけは、人は謙虚に頭を垂れるしかない。

河口龍夫は、そういう時間と人間と植物との関係をファーレ立川で作品にしてみせた。東西軸に植えられた3本の桂の幹の中ほどに、直径のそれぞれ異なった3つの鉄製の輪が懸けられている。木が育つほどに幹は成長し、ついにはこの輪と同じになる。この輪の太さは、2039年、2116年、2132年が想定されている。

「関係—未来」と名付けられたこれらの鉄輪は、人間と植物の転生と時間の関係を示して興味が尽きない。こんな作品があるのもファーレ立川の特色だ。

※輪の太さの設定年数は、2017年現在「2132年、2155年、2157年」に修正されています。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

関係の創造としての未来

森や林などから、新しい都市づくりのために樹木が移されてくることがある。

樹木は、森や林など自然のなかで生育し、成長していくのが最もふさわしいことのように思われる。

それらの木が都市に移され植樹される目的は、その都市の環境整備のためであり、その都市に移され植樹される目的は、その都市で生活や職を快適に営み、あるいは、外部から訪問したり、通過したりなどさまざまな方法で利用するすべての人間のためであって、けっして植物のためではないようだ。

移された樹木は、山や森や林といった自然の環境から、都市という半自然的な人工の環境で生育することになる。

周知のように、植物は動物と異なって、自ら移動することが困難である。しかし、自然の生態系において時には種子を風で飛ばし、鳥や昆虫に運ばせ、独自の方法で種をはぐくみ、種属の生長と発展を生れた環境において見事になしとげているのである。そのことは、植物が与えられた〈自然の摂理〉に矛盾することなく適応しているからではないだろうか。

簡単には移動できない樹木が、人間によって移動させられる。

移動させられた場が都市であれば、樹木は〈自然の摂理〉とは別のあらたなる摂理として〈都市との関係〉が発生してくる。

あるいは、樹木が繁茂した地域に都市化が進み、一部の樹木が都市環境のなかに残された場合も同様である。

都市環境の中で樹木は、その時から都市自体の繁栄とか凋落といった都市の運命となんらかの関係をともにすることになる。あるいは、都市の未来と密接な関係を保つことになると言いかえてもよい。

人間の寿命よりはるかに長寿な樹木によって、不確定な未来との関係を、現在の時空間で顕在化させようところみたのが「関係—未来」である。

「関係—未来」の作品構造は、都市の街路樹として移植された生木のうち三本に、ある直径の円周を保った銅の輪がはめられる。円周の長さは、その樹木の未来での生長を推定してはめられたものである。

それから、その銅の円周まで樹木が生長するであろう〈未来の年〉を想像し、決定するのである。

「関係—未来」にとって、銅の輪の円周が推定された年と樹木の実際の生長があっていたかどうかは、実は重要なのではない。したがって未来を表現しようとした作品ではないのである。むしろ、有限である私（我々）が、有限であるがゆえに生きることがたぶんできない未来に今、なんらかの関係をもちたい願望から創造されたのである。

さりとしてそれは、作品の恒久化でもなく、都市のモニュメントでもない。タイムカプセルの様に現在をそっくり未来に残したいのでもない。

それは、現時点のままで実体の定かではないはるかなる未来と関係したいのである。